

第125回貴重書展

# 江戸時代の西洋医学

—解剖書を中心にして—



平成22年6月24日(木)～7月14日(水)

鶴見大学図書館

江戸時代中期、漢方医学古方派の泰斗山脇東洋は、漢方古典に対する深い懐疑から、ついに人体の解剖観察にまで歩みを進めた。宝暦4年(1754)閏2月、公許を得て京都で刑死体の腑分け(解剖)を行い、その所見を『蔵志』に掲載した。これが日本最初の公の人体解剖であった。剖検の際、東洋は持っていたウェスリング(独)の解剖書の図と実物とを比較し、その図版の正確さに驚嘆した。その感動は生き生きと『蔵志』に述べられている。この解剖観察が先例となって、その後つぎつぎに刑死者の解剖が実施され、その所見は相次いで刊行された。

安永3年(1774)には杉田玄白、前野良沢等によって独人クルムスの解剖書(通称ターヘル・アナトミア)が翻刻され、『解体新書』と題して出版された。本書の出版は日本医学史上のみならず、日本文化史上画期的な大事業で、これを契機として蘭学は燎原の火の如く広まって、多くの人々に学ばれ、訳された医書は江戸だけで1,500部以上にのぼった。そのため西洋医学は広く社会に行きわたって、明治における洋学への転換の基礎が固まった。ヨーロッパの医学が解剖学の進歩に伴って発達したことを思えば、近代日本の医学が、山脇東洋の腑分けに始まり、『解体新書』を出発点として展開していったことは、まことに象徴的であるように思われる。解剖学に続いて生理学、病理学をはじめ、臨床各科においても同様の転機が訪れた。

蘭学以前の医学はいうまでもなく漢方医学の流れを汲むものであった。それは経絡を軸とし、陰陽五行説を背景として展開される医説に基いた医術で、実証医学というには程遠い思弁的傾向の強いものであった。彼我の大きな懸隔は、腑分けを試みた医師達はもとより、『解体新書』以後、続々と刊行された翻訳書を媒介として、広く世の医学者達の知るところとなった。

観念的医学から実証的医学へ、その転換への契機をもたらしたものは、翻訳医学書の出版そのものであった。それは単に医学に留まらず、日本文化そのものにも大きな転機をもたらし、やがて世界史上稀有の革命たる明治維新を実現する原動力となったのである。

ここに展示する各科の蘭学医書は、いずれも斯学のパイオニアとなった医学史上重要なモニュメントであり、各書の持つ文化史的意義の大きさは思い半ばに過ぎるものがある。

この展示が近代医学の出発点とその後の発展を省察する動機となれば、吾人の目的は達せられるのである。

歯学部研究員  
戸出 一郎

## 展示リスト

### 〈解剖書〉

1. 蔵志 山脇東洋著 復刻版 宝暦9年(1759) 昭和53年復刻 2巻2冊
2. 解体新書 クルムス(独)著 ディクテン(蘭)訳 杉田玄白重訳  
安永3年(1774) 4巻序図1巻5冊
3. (重訂)解体新書 クルムス(独)著 ディクテン(蘭)訳 杉田玄白訳 大槻玄沢重訂  
文政9年(1826) 4巻翻訳新定名義解4巻13冊
4. (重訂)解体新書銅版全図 クルムス(独)著 ディクテン(蘭)訳  
南(小柿)寧一図 中伊三郎刻 文政9年(1826) 折本1帖
5. Ontleedkundige tafelen 蘭訳原本  
クルムス(独)著 ディクテン(蘭)訳 1734年 アムステルダム版 1冊
6. 解体瑣言 柚木太淳著 寛政11年(1799) 1冊
7. 西説医範提綱積義 宇田川榛斎訳述 文化2年(1805)序 3巻3冊
8. [医範提綱内象銅版図] 宇田川榛斎訳編 亜欧堂田善鑄  
文化5年(1808) 折本1帖
9. 蔵府真写解体発蒙 三谷公器著 文化10年(1813) 4巻附録1巻5冊
10. 文政六年解臟図賦 池田冬蔵著 文政6年(1823) 1冊
11. 全体新論 ホブソン(英)著 清・陳修堂同撰 安政4年(1857) 清本翻刻版 2巻2冊
12. 解体学語箋 大野九十九編訳 明治4年(1871) 1冊
13. 虞列伊氏解剖訓蒙図 グレイ(英)原著 松村矩明等編訳 明治5年(1872) 折本2帖
14. 解剖新図(一名人身地学) スミス(米)原著 浦谷義春訳述  
明治8年(1875) 折本2帖
15. [刑屍腑分画帖] 江戸後期写 折本1帖

### 〈生理学〉

16. 西説医原枢要 卷之1 高野長英述 天保3年(1832) 1冊
17. 利攝蘭度人身窮理 リセランド(仏)著 エルペキウム(蘭)訳 広瀬元恭再訳  
安政3年(1856) 3巻3冊

### 〈病理学〉

18. 病因精義 小森桃塢講述 文政10年(1827) 10巻10冊
19. 病学通論 緒方洪庵訳述 嘉永2年(1849) 3巻合本1冊

〈内科学〉

20. 増補重訂内科撰要 ゴルテル(蘭)著 宇田川玄随訳 藤井方亭増訳  
文政9年(1826) 卷之1-12 12冊
21. 医療正始 ビスコフ(奥)著 エルジッキ(蘭)訳 伊東玄朴重訳  
天保6-弘化4年(1835-1847) 卷之1-21 19冊
22. 扶氏経験遺訓 ヒュヘランド(独)著 ハーゲマン(蘭)訳 緒方洪庵訳 緒方子文同訳  
安政4年(1857) 25巻薬方編2巻付録3巻 28冊

〈外科学〉

23. 瘍医新書 ハイステル(独)著 ユルホルン(蘭)訳 杉田玄白起業 大槻玄沢訳  
文政8年(1825) 3巻首1巻4冊
24. 外科収功・縋帯図式 大槻磐里著  
文化11年(1814) 3巻3冊
25. Chirurgie, in welcher alles, was zur Wund-Artzney gehöret  
ハイステル(独)著 ニュールンベルグ版 1743年 1冊
26. 整骨新書(各骨真形図) 各務文献著  
文化7年(1810) 3巻首1巻4冊

〈歯科学〉

27. 歯の養生法 ホワイト(米)著 桐村克己訳  
明治12年(1879) 1冊
28. 保歯新論 高山紀斎述  
明治14年(1881) 2巻2冊

## 〈解剖書〉

### 1 蔵志 山脇東洋著 宝暦9年(1759) 昭和53年復刻 2巻2冊

山脇東洋は、古方派の中では最も学問が広く、また最も実証精神に徹した人で、ただ伝統医学を深く究めるだけではおさまらなかつた。漢方の内容に対する疑問を解くために、人屍を開いて見ないではいられなかつたのである。たまたま宝暦4年(1754)2月、京都で刑死者があり、東洋は官許を得てこれを剖見した。本書は、彼によって行われた我が国で最初の実証的解剖の記録であつて、本書が後世の医学に与えた影響には計り知れないものがある。

※古方派とは、江戸時代前期、名古屋玄医が提唱した漢方薬術の一派

### 2 解体新書 クルムス(独)著 ディクテン(蘭)訳 杉田玄白重訳 安永3年(1774) 4巻序図1巻5冊

明和8年(1771)3月4日、刑死体の腑分け(解剖)を見た杉田玄白、前野良沢、中川淳庵等は、内臓の所見が、たまたま持参した解剖書 J. A. Kulmus 著 G. Dicten 蘭訳『Ontleedkundige tafelen』(通称ターヘル・アナトミア(展示5番参照))の解剖図と一致することに感動して、本書の翻訳を思い立ち、その翌日から作業にとりかかった。苦心の末、3年後の安永3年(1774)8月に『解体新書』と題して出版した。本書は医学書のみならず、西洋の書物全体から見て最初の本格的翻訳書であり、本書の出版は日本医学史のみならず、日本文化史上画期的な事業となった。

### 3 (重訂)解体新書 クルムス(独)著 ディクテン(蘭)訳 杉田玄白訳 大槻玄沢重訂 文政9年(1826) 12巻序附言1巻 13冊

『解体新書』の文に誤りの多いことは、杉田玄白自らがよく知っていたことで、玄白は高弟の大槻玄沢に命じてこれを改訂し、『重訂解体新書』を作らせた。本書はクルムスの解剖書に依つてはいるが、単なる翻訳ではない。注釈にあたる名義解には、多くの蘭書を読破して研鑽を積んだ玄沢の主観が堂々と盛られていて、すでに翻訳書の域を脱している。寛政10年(1798)に完成。

### 4 (重訂)解体新書 銅版全図 クルムス(独)著 南(小柿)寧一図 中伊三郎刻 文政9年(1826) 折本1帖

『重訂解体新書』の附図として、大阪の中伊三郎が、クルムスの原書を模刻して作ったものである。中伊三郎は蘭学者中天游の従弟に当たる人である。

### 5 Ontleedkundige tafelen (ターヘル・アナトミア) 蘭訳原本 クルムス(独)著 ディクテン(蘭)訳 1734年 アムステルダム版 1冊

通称「ターヘル・アナトミア」と呼ばれる本書は、ドイツの医師で解剖学者のクルムス(Kulmus, Johann Adam, 1689 - 1745)が著した解剖書『Anatomische Tabellen』第3版(1732)を、オランダ人医師ディクテン(Dicten, Gerardus, 1696 頃-1770)が蘭語に訳したもの。原文に忠実な逐語訳である。蛇皮装。

6 <sup>かいたいさげん</sup> 解体瑣言 柚木太淳著 寛政 11 年(1799) 1 冊

著者の柚木太淳は京都の眼科医である。寛政 9 年(1797)、京都で男屍を解剖し、その記録を寛政 11 年(1799)に刊行したものである。本書の特徴は、解剖の順序・用具・術者それぞれの役割、心得等を詳しく述べている点にある。

7 西説医範提綱積義 宇田川榛齋訳述 文化 2 年(1805)序 3 巻 3 冊

宇田川玄眞(号榛齋)が、数種の蘭書をもとにして著した本書は、解剖学の精粹を説きながら生理、病理にまで内容が及んでいる。<sup>にゅうび</sup>乳糜・腸間・膜・臍・腺などの新用語が取り入れられており、当時手頃な入門書として広く求められた。

8 [医範提綱内象銅版図] 宇田川榛齋訳編 亜欧堂田善鑄 文化 5 年(1808)  
折本 1 帖

『西説医範提綱積義』の附図として、亜欧堂田善(永田善吉)により<sup>ちようせん</sup>彫鑄された。本書に載る 52 の解剖図は、日本最初の銅版解剖図で、本文と共に多くの人に読まれた。

9 蔵府真写解体発蒙 三谷公器著 文化 10 年(1813) 4 巻附録 1 巻 5 冊

西洋解剖書の翻訳が相次いで中で、漢洋両医学の折衷を企て、洋学が事実在即することを認めたいうで、その事実を基に漢方古書の内容を説明しようとする漢方医の試みがあった。本書はその代表的なものである。書名に「蔵府真写」と冠してあるように、三谷公器は、享和 2 年(1802)、京都で実際に行われた刑屍の解剖に参加して人体の内景を観察した。

諸器官の大きさ等については、橘南蹊が天明 3 年(1783)に解体を行ったときの所見「平次郎解剖図」と三雲環善が寛政 10 年(1798)に京都で行った時の所見「施薬院解男体臓図」の内容も併せ記されている。従って京都における 3 度の解剖の総合結果となるものである。

10 文政六年解臓図賦 池田冬蔵著 文政 6 年(1823) 1 冊

小森<sup>とうとう</sup>桃塙の門人であった福井藩医池田冬蔵が藤田長禎と共に、文政 4 年(1821)12 月 16 日京都で 23 才の刑死体を解剖した記録である。優れた説明文と多くの図が附されているが、中でも乳糜管が腸壁より発して乳糜槽を形成し、さらに上行して鎖骨下静脈に入る所が 2 本に分かれていることを明記していることは特筆に値する。

初版：『文政四年解臓図賦』文政 4 年(1821)

11 全体新論 ホブソン(英)著 清・陳修堂同撰 安政 4 年(1857)  
清本翻刻版 2 巻 2 冊

上海在住の英国人ホブソン(Hobson, Benjamin, 1816-1873)が、中国人の協力の下、西洋の医学を参考にして成したもので、解剖学、生理学を中心に医療全般についてその基本を述べている。中国羊城で咸豊元年(1851)に刊行された。本書は日本での復刻版である。漢文、訓点付。

## 1 2 解体学語箋 大野九十九編訳 明治4年(1871) 1冊

我が国最初の活字印刷による医学辞書。英語・ラテン語の解剖用語の翻訳である。明治4年(1871)文部省官版として出版された。

## 1 3 眞列伊氏解剖訓蒙図 ぐれい いし かいぼうきんもろうず グレイ(英)原著 松村矩明等編訳 明治5年(1872)

### 折本2帖

英国人グレイ(Gray, Henry, 1825-1861)の解剖教科書『Anatomy, descriptive and surgical』(1858)の附図の翻訳。

## 1 4 解剖新図(一名人身地学) スミス(米)原著 浦谷義春訳述 明治8年(1875)

### 折本2帖

米国ペンシルバニアの碩学ヘンリー・スミス(Smith, Henry H., 1815-1890)の著書『Anatomical atlas, illustrative of the structure of the human body』(1867)を大阪の浦谷義春が翻訳したもの。原題にちなんで本書は一名「人身地学」と記されている。

## 1 5 [刑屍腑分画帖] 江戸後期写 折本1帖

江戸時代、百姓町人が重罪を犯した場合、唐丸籠に入れられて牢獄へ送られた。そこで奉行による吟味が行われ、死罪又は遠島流刑の場合は、奉行が將軍の裁可を経て、与力を通じて判決を申し渡した。牢庭で死罪を言い渡された罪人は、切場に座らされ、首切役同心の刃を受けて斬首された。

処刑後血を全部出した後、腑分け(解剖)を施され、それを医師が見学し、絵師が写生した。腑分けが終われば裏門から運び出された。首は晒場で三日二夜晒された後すてられた。

本図は腑分けの様をリアルに描写した点で珍しく、重罪人処刑の記録としても価値は高い。おそらく狩野派絵師の手に成るものか、芸術性の高い作品である。

## 〈生理学〉

## 1 6 西説医原枢要 卷之1 高野長英述 天保3年(1832) 1冊

シーボルトの弟子であった高野長英は、多くの医学訳述原稿を現在に伝えているが、刊行されたのは『西説医原枢要』(12巻といわれる)の中の巻之1のみである。

オランダの生理学の著書数種を参照して纂述したもので、本文は漢文、註解は和文で書かれている。我が国での生理学書の出版は本書が初めとなる。

## 1 7 利攝蘭度人身窮理 りせらんど リセランド(仏)著 エルペキウム(蘭)訳 広瀬元恭再訳 安政3年(1856) 3巻3冊

原著はリセランド(Richerand, Anthelme Balthasar, baron, 1779-1840)の『Nouveaux elemens de physiologie』(1801)をエルペキウム(Erpecum, A. van, 1779-1840)が蘭訳した『Richerand's nieuwe grondbeginselen der natuurkunde van den mensch』第9版(1826)である。刊行されたのは最初の「誘導編」3巻のみで、本書は安政2年初版本の再刻本である。訳者の広瀬元恭は、基

礎医学の知識が臨床医学の根底となることを主張した、高い見識をもつ医学者であった。

\* 人身窮理とは、江戸時代の蘭学で生理学のこと

## 〈病理学〉

### 1 8 病因精義 小森桃塙<sup>とうわう</sup>講述 文政10年(1827) 10巻10冊

「治療の標的は病因にあり」とし、「治療をなすが為には病因を明らかにするの要あり」として、各科の疾病を列挙し、その病因について論述したもの。著者の小森桃塙は、海上随鴟<sup>うながみずいおう</sup>の高弟である。

### 1 9 病学通論 緒方洪庵<sup>こうあん</sup>訳述 嘉永2年(1849) 3巻合本1冊

著者緒方洪庵は、師・宇田川榛齋の遺志を継いで病学(病理学)の著書を企て、榛齋の遺稿をもとに、ヒュヘランド(Hufeland, Christoph Wilhelm, 1762-1836)、コンスブリュク(Consbruch, Georg Wilhelm Christoph, 1764-1837)、コンラデー(Conradi, Johann Wilhelm Heinrich, 1780-1861)等の病学者とその他の蘭学書を参照して本書『病学通論』3巻を出版した。洪庵は全12巻とするつもりであったらしいが、他の原稿がどうなったか不明である。

## 〈内科学〉

### 2 0 (増補重訂)内科撰要 ゴルテル(蘭)著 宇田川玄随<sup>げんずい</sup>訳 藤井方亭<sup>ほうてい</sup>増訳 文政9年(1826) 卷之1-12 12冊

寛政4年(1792)に宇田川玄随は、我が国で初めて本格的内科専門書『西説内科撰要』18巻を訳述したが、更にその増補原稿を書き、門人藤井方亭が『増補重訂・内科撰要十八巻』として文政5年(1822)に出版した。初版の原本はヨハネス・ゴルテル(Gorter, Johannes de, 1689-1762)の『Gezuiverde geneeskunst』(1744)であるが、増補重訂は第4版(1773)を原本としている。64種の疾病をあげており、本書により始めて現代内科学の原始型が完成した。本学は13-18巻を欠く。

### 2 1 医療正始 ビスコフ(奥)著 エルジッキ(蘭)訳 伊東玄朴<sup>げんぱく</sup>重訳 天保6-弘化4年(1835-1847) 卷之1-21 19冊

訳者の伊東玄朴はシーボルトに学び、江戸お玉ヶ池種痘所の創立者の一人として名高い。本書はプラーク大学教授ビスコフ(Bischoff, Ignaz Rudolph, 1784-1850)の著書『Grundzüge der praktischen Medizin』(1822-1825)をエルジッキ(Eldik, C. van, 1971-1857)が蘭訳した『Grundsätze der praktische Heilkunde』の重訳である。各個の疾病を詳細に論述した精緻なる訳書で、安政5年(1858)に完結し24巻より成るが、本学所蔵は21巻まで。

### 2 2 扶氏<sup>ふし</sup>経験遺訓 ヒュヘランド(独)著 ハーゲマン(蘭)訳 緒方洪庵<sup>こうあん</sup>訳 緒方子文<sup>しぶん</sup>同訳 安政4年(1857) 25巻薬方編2巻付録3巻 28冊

本書は、ベルリン大学教授ヒュヘランド(Hufeland, Christoph Wilhelm, 1762-1836)の名著

『Enchiridion medicum』(1836)をハーゲマン (Hageman, H. H. Jr)が蘭訳した『Enchiridion medicum; handleiding tot de geneeskundige praktijk』(1838)のうちの実際篇(Praxis)を重訳したもの。従来の訳書より一段と精確かつ明晰で、我が国の西洋内科は本書により始めて大成した。天保13年(1842)に完成。

## 〈外科学〉

### 2 3 瘍医新書：誘導篇 ハイステル(独)著 ユルホルン(蘭)訳 杉田玄白起業 大槻玄沢訳 文政8年(1825) 3巻首1巻4冊

大槻玄沢が師・杉田玄白の命により、ドイツの外科医ハイステル(Heister, Lorenz, 1683-1758)著『Chirurgie』第3版(1731)を、ユルホルン(Ulhoorn, Hendrik, 1687頃-1746)が蘭訳した『Heerkundige onderwyzingen』(1741)を重訳した。原本は、外科に関するすべてを網羅した大部なものであるが、本書は誘導篇(入門編)のみ。序によれば寛政2年(1790)に完訳したとあり、誘導篇以外の写本が現存する。

### 2 4 外科収功・繙帯図式 大槻磐里著 文化11年(1814) 2巻図式1巻3冊

大槻磐里(玄幹)は初めて和蘭文法書を出版したことで有名な人。父・玄沢のハイステル外科書の訳書『瘍医新書』の中の「繙帯篇」を要訳し、図式を加えて『外科収功』と題して刊行した。

### 2 5 Chirurgie, in welcher alles, was zur Wund-Artzney gehöret ハイステル(独)著 ニュールンベルグ版 1743年 1冊

著者ハイステルはドイツにおける近代外科学の創始者で、数多くの著作を残している。中でも本書は代表的な著作で、入門の規則に始まり、治療法、術式、包帯術、機器等、外科に関するすべてを網羅した名著である。当時ヨーロッパで各国語に訳され、1718年の初版から6版(1779)を重ね、その後縮刷版も刊行されている。

### 2 6 整骨新書(各骨真形図) 各務文献著 文化7年(1810) 3巻首1巻4冊

各務文献は大阪の接骨医で、木骨を工人に作らせて教材とした。本書は解剖学に始まり、接法、後法、屈伸法、縮法の4法をもって整骨すべきことを述べ、更に器機、包帯、薬方に及んでいる。巻首の「各骨真形図」は骨の解剖図集で、精確、独創的な点で驚くべきものがある。

## 〈歯科学〉

### 2 7 歯の養生法 ホワイト(米)著 桐村克己訳 明治12年(1879) 1冊

日本人の手に成る最初の西洋歯科医学書で、一般大衆向きの口腔衛生啓蒙書である。原書はホワイト(White, James William, 1826-1891)の『The mouth and the teeth』(1879)である。

### 2 8 保歯新論 高山紀斎述 明治14年(1881) 2巻2冊

高山紀斎は、明治5年(1872)から11年(1878)までの7年間、アメリカの歯科医ヴァンデンボルク(Van Denburgh, Daniel, 1824-1911)に歯科医学を学んだ。日本人の歯が欧米人に比して弱

いことを知り、歯牙保護の方法を示すことを目的として、米国の諸歯科医学書を参照して一書を成し、『保歯新論』と題して出版した。

本書は歯牙解剖、発生に始まり、疾病、治療、補綴、衛生について簡略に述べている。本格的歯科医学書としては、我が国初の出版物である。